

氏 名 風 間 計 博

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第343号

学位授与の日付 平成10年9月30日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 『「二重の窮乏」下の平等理念

－現代世界とキリバス南部環礁の社会生活－』

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 吉 田 集 而

教 授 清 水 昭 俊

助 教 授 岸 上 伸 啓

教 授 山 本 真 鳥（法政大学）

論文内容の要旨

本論文は、キリバス共和国南部、タビテウエア・サウスの一村落における実地調査に基づいた民族誌である。本論の課題は、調査地における社会生活を詳細に記述し、そこに見出される特徴的な現象を世界システムとの関連の下に理解することである。

調査地の小規模な社会は明らかに開放系であり外部世界の動向と無縁ではないが、同時に直接世界システムと結合しているわけでもない。まず、両者を段階的に架橋することが理論的課題である。そこでオセアニア島嶼国の MIRAB 経済 (MI: 出稼ぎ移民、R: 移民からの送金、A: 財政援助、B: 官僚制) 論を援用し、さらに MIRAB 経済の典型から外れたキリバスの国民経済を FFAB 経済 (F: 基金運用益、F: 入漁料、A: 財政援助、B: 官僚制) と規定し、調査地の社会と世界システムとの接合を試みた。MIRAB 経済に特徴づけられるオセアニア島嶼国は世界システムの「最周辺」、さらにキリバスは「最周辺の周辺」国家と位置づけることができる。タビテウエア・サウスは「最周辺の周辺」国家内のさらに後背地にある。キリバスの FFAB 経済を支える国家のレント収入は、その大部分が首都に投下される。後背地のタビテウエア・サウスには、国家収入を配分する機能を担った官僚制が十分に浸透しておらず、村落の人々まで配分は行き渡っていない。人々はコプラ収入と不定期の賃労働により現金を得るしかない。また、キリバス南部の環礁は中央太平洋の乾燥帯に位置し、降雨量が不安定でありしばしば旱魃に襲われてきた。歴史的な生業活動の衰退も相俟って、人々が在地の食料のみで生活を維持するのは困難な状況にある。移入物資に食料や必需品を依存する一方で、交通・流通基盤が未整備なために、慢性的な物資欠乏が生じている(第 I、II 章)。

このようにタビテウエア・サウスは、世界システムの中の位置および生業経済の脆弱性によって窮乏を条件づけられており、これを「二重の窮乏」とよぶことができる。「二重の窮乏」条件下において、同地の人々が在地の論理を用いて、いかに社会生活を編成しているかが、本論の民族誌的記述と考察の主題である。それを要約すると以下ようになる。

1) 国家の官僚制やキリスト教会と村落社会との接点に集会所 (マネアバ *mwaneaba*) が位置している。旧来の民族誌に描かれた「伝統的」マネアバとは異なり、現在のマネアバは行政末端機構や学校制度、キリスト教会に付随し多様化している。マネアバは、関係する社会集団の運営に関わるさまざまな事柄を話し合い、決定する場であり、島社会に対する政府または外国からの政治的・経済的働きかけは、全てマネアバでの討議を経由する。合議では、政府の役人や教員など外来者はあくまで客として扱われる。彼らは、政策等を人々に説明したり説得する役割しかもたない。また合議は長老を中心に行われるが、突出した発言力をもつ個人は不在であり、合議参加者全員が合意に達するまで話し合いは続けられる。合議の決定は平等理念 (ボーラオイ *boraoi*) に沿う必要があり、例えば政府からの賃労働の配分は各村や個人の間で均等でなければならない。決定は人々に対して強制力を持ち、違反者には罰 (*tua*) が科せられることもある。マネアバは、外部世界の論理を遮断したり、受け入れ可能な形に変換する装置であり、社会集団内部の集団的メカニズムを体現している(第三章)。

2) マネアバでは、饗宴 (ポータキ *botaki*) が頻繁に開催されている。国家やキリスト教会の行事、外来者の歓送迎、人生儀礼などさまざまな機会に行う饗宴をすべてポータキ

とよぶ。ボータキには必ず共食が伴い、さらに参加集団ごとの踊りや合唱の対抗戦、客と主催者間の贈与交換が行われる。ボータキは社会集団間あるいは外来者と村人間の緊張関係を友好関係に転化し、平等理念を繰り返し再生産する場である。タビテウエア・サウスでは、社会集団レベルに平等理念がきわめて強く作動している(第IV章)。

3) 日常生活においても、懇請(*bubuti*)や衆人監視によって世帯や個人レベルの平等化が起こっている。個人的な財蓄積は妬み(*bakantang*)を喚起させ、人々の間で軋轢を招く。通常、人目に晒した所有物は他者からの懇請の可能性を排除することができない。秘匿によってのみ個人的所有物に排他性を賦与することができる。人々にとって、窮乏状態(*kainnano*)にあると他者から見なされることは恥(*mama*)である。持つ者(*kau bwai*)は他者に与えすぎて自らが窮乏に陥ると愚か(*tabaua*)といわれる。逆に多くを秘匿すると利己的(*katei n rang*)、吝嗇(*kaiko*)といわれてしまう。このような状況下において個人は、物資や財を人目に晒して鷹揚に分け与えるか、適度に秘匿して他者の懇請を回避するかを選択するしかない(第V章)。

4) 調査期間中の物資が極度に欠乏した時期、多くの村人が小規模商売を始め、やがて個人経営の商店が林立するに至った。流通の再整備により物資欠乏は緩和されたが、物価上昇や一部個人の財蓄積が生じ、不公平(ボーブアカ *bobuaka*)な状況に対して不満の声があがった。ボーブアカを解消するための方法を探るべく、島全体の合議がマネアバで繰り返し開催され、結局首都から卸売会社の支店を誘致することに成功した。ボークラオイを揺るがす事態が生じたとき、人々は集団的メカニズムを作動させて解決を図る(第VI章)。

5) タビテウエア・サウスでは、生業活動のみによる生活維持が困難であるため、移入物資に依存せざるを得ない。そこには商品交換が必然的に伴う。ボークラオイ理念に合致する贈与交換とは異なり、商品交換には同理念に反する財蓄積が起こりうる。しかし、2つの交換は相互に矛盾しながらも併存している。人々は場所や相手に応じて行動形態を切り替え、両者を使い分けている(第VI章)。

6) 現在のタビテウエア・サウス社会は、マネアバを中心とする集団的メカニズムと平等理念とにより特徴づけられる。そこでは社会内に国家の官僚制等、外部世界の論理が入り込むことを有効にブロックし、同時に、主体的に社会生活を形成する場を維持している。マネアバ内の合議やボータキにおいて集団レベルの平等化が作用し、さらに日常的な個人の生活レベルにおいても、平等理念が卓越する。持つ者の所有物は平等理念に沿って常に分散化し、平等化が実現する。世界システム「最周辺の周辺」国家の後背地にあるタビテウエア・サウスは、窮乏を外部から条件づけられている。その条件下で、長老を中心とした社会集団は主体的に対応し、在地の論理によって窮乏条件に対峙し、人々の生活維持は可能になる。すなわち「二重の窮乏」下において、集団的メカニズムや平等理念によって財や物資は社会集団成員に行き渡り、持たない者の欠乏は補填される。人々の主体的対応は、社会集団成員全体の生活維持を可能にする「適応」ということができる(第VII章 考察)。

本論文において、世界システムと調査地の小規模な社会とを理論的に架橋することの重要性を指摘した。そして MIRAB 経済および FFAB 経済という地域的な国民経済を媒介させて両者の溝を埋めた上で、微細な社会の主体性を具体的に描くことが可能であることを示した。

論文の審査結果の要旨

本論文は、オセアニア島嶼国家の一小国、キリバス共和国の南部のタビテウエア・サウス地域の村落での13か月間の現地調査、及び比較のためのニクナウ島の村落における1か月間の現地調査、首都のタラワでの8か月間の文献や関係機関などにおける調査を含め、合計22か月間の調査によって生みだされたものである。

キリバスは世界の周縁の国家であり、そのキリバスの中でも辺境の地である村落を調査地にしたが、このような村落においても、外来の物質や情報を無視することはできない。これまでのキリバスにおける民族誌においては、「伝統的」なもののみを取り出し、現実に行っている物事を軽視してきたきらいがあるが、本論文はそうした外来の物事が組み込まれた状況を記述し、現実生きる人々の生活を分析しようとしている。特に環礁であるこの地域の村では、在来の生業ではもはや生存が難しく、辺境であることの窮乏に加えて、生態学的にも窮乏している「二重の窮乏」状態にある状況を綿密に調査分析している。

そこではマネアバと呼ばれる全員の参加する集会在外側と内側の結節点である。外来の人々はどのような人であれ、官吏や国会議員になったものも含めて、客として遇され、集会の決議には参加できない。そして、外部からの仕事や物資は、この結節点をフィルターにして、村での基本原理である平等理念に適合するように改変される。同時に集会の合議は、形としては長老を中心として行われるが、突出したリーダーを持たず、この合議は集団コントロールの力を持ち、平等理念が実現されている。この装置によって、外部世界の論理を内部世界の論理に転換している。しかし、本論文はこの集会是かつての集会とはすでに異なったものであり、現在ある形に再編成されたものであることを明らかにしている。

この集会を中心として頻繁に饗宴が開かれる。物資が欠乏したときの再分配にこの饗宴は大きく寄与している。すなわち、外部の訪問者や現金収入の道を持つ人々に、現金やタバコのような買うことによってしか入手できないものの持参が期待されており、それらと食物の交換が行われ、村に不足するものを入手する機会を巧みに創り出している。そして、饗宴もかつてあった形から変化し、かつその頻度も増加していることも著者は明らかにしている。すなわち、集会を中心として行われる饗宴も、現在ある状況に適応して催されているのである。

一方で、こうした平等理念の社会で生きる個人あるいは個々の家族について、平等理念と個人的欲求の葛藤を詳細に観察し、かつ緻密に分析している。個人間では、平等理念に反するような蓄財は懇請によって平等化される。村人どうしても懇請が行われるが、特に外来者や現金収入の道を持つ人々に懇請が行われ、他の村人との平等化がはかられる。この懇請は社会的に認められたことではあるが、かつては血縁地縁集団（カーイング）内だけで行われていたと考えられ、それが後に受容されたキリスト教の相互扶助の精神によって外部の人にまで拡大された蓋然性が高い。懇請に対しては鷹揚に分け与えることが期待されているが、一方で懇請を恥と見る人もいる。また、懇請に対して、物資や金銭、秘密の知識を隠匿することが行われる。過剰なる蓄財やその隠匿は強い批判を浴びるが、饗宴などへ食物を持って行くことができないような窮乏状態や、日常生活に窮するような状態になることは恥であると考えられている。そのため、それらを避けるための隠匿は見逃さ

れている。

今一つ著者が注目しているのは、商品経済にのっとった商店が物資をもたらしていることである。しかし、個人商店は個人の財の蓄積となり平等理念に反する。極端な窮乏状態では物資を供給することに寄与するため、それなりに人々は存在を認めるが、窮乏状態を脱すると蓄財を告発することの方に焦点が傾き、集会の合議により個人商店の活動を阻害する方向に修正が行われる。また、ここでは商品経済と贈与交換との微妙な変化が見られ、かつては売り買いされなかったものが売り買いの対象となったり、商品における掛け売りが贈与交換に近い形になったりしている。後者は個人商店の成立を難しくしている現象である。

また本論文では、世界システム論をgrand theoryとし、人類学者が現地調査の方法で扱うミクロな状況との間を架橋しようと試みている。オセアニアに特徴的な国民経済類型(MIRAB [migration, remittance, aid, bureaucracy]経済論)を手がかりにして、キリバスが該当する亜類型としてFFAB [fund, fish royalty, aid, bureaucracy] 経済なる類型を中間項として設定し、調査地であるタビテウエア・サウスをその後背地として位置づけることによって、人類学者が研究する微細な小社会を、グローバルな大状況と関連させて認識しようとしている。この手法は、ややもするとミクロな分析のみに終始する従来の人類学的方法に挑戦する枠組みであり、その意欲は高く評価される。ただし、この中間項の設定が十全に機能するかどうかは、今後の検討に待つべき部分がある。

以上のように、本論文は現地調査に基づき、キリバスの離島における現在の社会生活を生き生きと描く民族誌として成功している。離島の生活の集団レベルの構造ないし制度と実際の具体的過程、そして個人による他者、集団、理念等との駆け引き、葛藤、打算などを克明に記述している。集会と饗宴を介して実現される平等理念と極端なまでの一般的互酬性は、キリバスの離島という厳しい条件を生きのびる適応として描かれている。歴史的变化に配慮しながらも、窮乏する現在の社会的現実にもっぱら焦点をあわせて観察記述した手腕は高く評価されるものであり、本論文は学位を授与するに十分に値するものと認定する。